

ボブベックのやさしい投資信託

第27回 株式型投資信託のリスク
その3

今回も前回に引き続き、システム型ファンドとアクティブ型ファンドの違いに焦点を当てて解説します。

(7-a)株式型ファンド - アクティブ型とシステム型ファンド

システム型ファンドの特徴

シミュレーション - システム型ファンドは、シミュレーションによって、どのようなパフォーマンスが想定できるかを調べる事が出来ます。こういう考え方で過去に運用を行っていたら、ファンドの基準価額はいくらになっていたのか。そういったシミュレーションは、コンピューター技術が発達した現在、家庭にあるパソコンでも手軽に出来るようになりました。当然、運用会社は、大型のコンピューターを使って、優れたシミュレーション結果になるような運用手法を開発し、シミュレーション結果とともに投資家に提示するのです。しかしながら、シミュレーション結果をそのまま鵜呑みにする事は出来ません。どのような条件でシミュレーションをしたのかを注意深く調べなければ、そのシミュレーションと同じような結果を将来も得られるかどうかは分からないのです。

例を挙げて説明しましょう。前回説明した低P E Rの銘柄を購入するファンドの場合、P E Rを計算して、その数値が低い銘柄を投資対象とします。P E Rは(株価÷一株当り当期利益)という計算式で計算されますから、当然、"一株当り当期利益"がいくらになるかが分からなければP E Rは計算できません。しかし、運用している時点で投資対象会社のその年度の利益など分かりませんから予測値を使います。ところが、過去のシミュレーションをする際には、その期間の業績が既に分かっているのですから、パフォーマンスが良くなるのも当然なのです。

予測値を入力して投資判断をするような

運用手法の場合、過去のシミュレーションでは、その予測値が結果として分かっているのですが、実際の運用では予測値の精度によって、そのパフォーマンスが大きく変わってしまう事に注意をしなければなりません。

アクティブ型ファンドの特徴

長所 - システム型とは逆に、アクティブ型ファンドは、フレキシブルな運用ができるというメリットがあります。政治や経済の動きを見極め、将来大きく成長する企業を見つけ出し、そこに投資していく、これこそアクティブ運用の醍醐味と言えるでしょう。

短所 - アメリカの投信業界においても、ファンドマネージャーランキングの上位4分の1に毎年入りつづける人と言うのは稀です。ある年に素晴らしいパフォーマンスをあげたファンドマネージャーが次の年には、下から数えた方が早い場合すらあるのです。実際、統計をとってみると、ある年のファンドマネージャーのパフォーマンスランキングと次の年のパフォーマンスランキングには全く相関がないと言う結論になったそうです。

ですから、ある年のパフォーマンスがよかったからと言って、そのファンドマネージャーに全てを託すなんて事は、リスクが非常に高いと言う事なのです。最近はカリスマファンドマネージャーなどとファンドマネージャーを前面に押し出してファンドを宣伝する事も多いようですが、たった一年や二年のパフォーマンスで、ファンドマネージャーを崇拜することなど具の骨頂と言えましょう。

アクティブファンドの例(1) - ファンドマネージャーがアクティブに運用して、インデックスに勝ちつづける事など殆どないと書きましたが、そんな中、長い間トップファンドマネージャーとして運用しつづけたのが、フィデリティ投信のピーター・リンチです。彼の著書は日本語訳されていますので、株式投資に興味のある方は読んでみると良いでしょう。私の知る限り「株に

勝つ」「株式投資の法則」の二冊が日本語訳されています。彼は 1977 年から 1990 年までフィデリティ投信の旗艦ファンドであるマゼランファンドを運用し、総資産 20 億円から 1 兆 4000 億円（現在は 10 兆円超）にまで増やしたのです。